

新ガザ・モノローグ2024 - イントロダクション -

以下に収められた新たなモノローグは、ガザ地区で進行中のジェノサイドの中で生き抜く人々の、生々しく、胸が締めつけられる現実を描いています。これらの作者たちは「ガザ・モノローグ・オーサーズ」として世界的に知られています。その多くは10代の頃にモノローグを書き下ろし、それらは62カ国以上の劇場や大学、カフェや街角、病院や監獄など、無数の場所で読まれ、世界中の読者と深く繋がる機会を得てきました。

それぞれの物語は、イスラエル占領軍によるジェノサイドの中での人間の感情の複雑さ、痛み、そして不屈の精神を証明しています。それは、生存を賭けた闘争だけでなく、愛や勇気、そして喜び、愛する人々や家、さらには人間らしさを失う中でも存在し続けることを示しています。最も暗い時代にあっても、人間の魂は光と意味を求めるということを、これらの声は私たちに思い出させてくれるのです。

これら新たな証言では、爆撃や強制移動、非人道的な包囲という過酷な生活の中で引き裂かれた人生について聞くことが出来ます。ジェノサイドが日常の喜びを圧倒する世界で、失望、恐怖、希望、安全と平和への渴望を語っています。これらの物語の作者たちは単なる犠牲者や受動的な生存者ではありません。すべての瞬間が命の危険を伴い、彼らは今日そして明日も続く不確実性に立ち向かっているのです。

新たなモノローグを初期の『ガザ・モノローグ』と結びつけることで歴史的な深みを持たせると同時に、ガザにおける人々の現実を記録し続ける意味を示します。

これらの物語の作者たちは、抑圧に対して創造性と主体性を發揮する優れた思想家であり、リーダーです。彼らの言葉を通じて、最も脆弱でありながら決して屈しない人間の魂の一端を垣間見ることができます。この一年以上にわたる植民地虐殺を耐え抜いてきた彼らは、それでもなお人間性を示し続けているのです。

これらのモノローグは、ガザの物語であるだけでなく、普遍的な安全や尊厳、そして人類に対する国際的な義務としての平和への渴望を示しています。これから出会う声が真実であり、緊急性を持ち、世界の注目だけでなく、断固とした継続的な行動を緊急に必要としていることを理解しながら、これらの物語を読んでいただきたいと思います。

2024年 ASHTAR 劇場
(翻訳 藤田ヒロシ)

#1 アフマド・ターハー 2024年11月12日

世界への最後のメッセージ

かつて私は若い人の移住、特に違法移住に強く反対でした。移住先の国での安住、その国籍を得るためにすべてを費やすというのは、悲劇的な賭けだと思っていたからです。家族や友人、貴重な時間、さらには若いころの財産、それがもたらす損失は計り知れないにもかかわらず、仕事がない、収入が低い、将来が不安、終わりのない戦争、これらすべてを言い訳にして行われているのです。私たちには次のような先人の格言があります「若いころの友人や若いころの財産は取り返せない※1」

しかし、今ではどのような形であれ移住を支持します。友人や見知らぬ人、誰であっても、命の尊厳が守られる場所を探すよう、少しでも安全と希望が得られる土地を求めるよう、強く勧めます。かつて誇りに思っていた祖国は、今や夢と愛する人々の墓場となりました。この土地は私たちから希望を奪い、家族や友人を奪い、彼らが亡くなるのを沈黙の中で見守るしかない状況にあるのです。友人たちの肉片をこの手で拾い集め、それを埋葬したときの苦痛についてはここで語りたくありません。それよりも、私の人生で最も衝撃的だった瞬間について話したいと思います。

それはある日の夕方、私と家族が一日の終わりにお茶を飲んでいた時に起きました。突然、小型無人機が私たちの家に侵入し、銃撃を始めたのです。私たちは恐怖で床に伏せましたが、父が撃たれてしまいました。傷口から血が流れ出す中、父は苦痛に耐えながら叫びました。「動くな！誰も動くな！」その声は私たち全員を守ろうとする必死の叫びでした。僅かでも動けば命を奪われる、そんな恐怖が支配していました。私はそこに横たわり、恐怖と無力感で身動きが取れませんでした。父の血が床に広がり、その一滴一滴が私自身を何度も死なせるように感じられました。父に触れるほど近くにいながら、私は何もできませんでした。動くことも助けることもできなかったのです。無人機がついに去るまで、私たちは全員、息を殺して待ち続けました。ようやく安全になり、父を抱えて病院へ運びました。父は命を取り留めましたが、40日間の入院生活の末、今では足を引きずりながら歩いています。あの日の出来事が体に刻まれた消えない証です。

私が伝えたいのは、私たちが生きるこの現実です。今では死ぬこと自体が最も恐ろしいことではなくなりました。もっと恐ろしいのは死を取り巻く無力感です。愛する人が命を失うのを目の前で見ながら、自分自身の命を危険に晒す恐怖の前に何もできない — 動くこと、手を差し伸べること、助けようとすることさえも — それは言葉では表せないほどの苦しみです。

私にとって、祖国とは家族であり、安全であり、そして物質的にも精神的にも必要な安らぎそのものです。これらすべてが脅かされることなく守られる場所こそが祖国だと思っています。

だからこそ私は、家族と共に安全に過ごせる場所、常に死の脅威に晒されることのない場所への移住を考えています。

そして、もう誰にも私にスローガンや論説、助言など言ってほしくありません。私がこれまで経験してきたことは、簡単に言葉で片付けられるものではないのです。かつて私たちが美しい信じていたガザで、いま私たちが生きている現実は、人間が耐えられるものではないのです。

訳注

※1 若いころに得たものは他のどんな努力でも代替できないという価値観を反映し、若いころに得たものを大切にするべきだという教訓。また、若いころの経験や努力は、後になって初めてその重要性がわかることが多い、という意味合いも含まれている。

#2 アシュラフ・アッ=スースィー 2024年11月11日

ガザ、私の心の深い傷 - 人道を叫ぶ者たちの目の前で殺されていく土地と人々！

罪のない子供たち、女性たち、高齢者たちが虐殺されるのを見ていながら、病院、学校、文化、そして芸術が破壊されるのを黙認していながら、世界が語る人道主義とは一体何なのでしょうか？私たちの夢が消え去り、未来が破壊され、エネルギーが尽き果て、命も魂も奪われていくのを、誰も見て見ぬふりをしている現状の中で、世界は一体何を語っているのでしょうか。

私は今、ジェノサイド、民族浄化、そして人々の強制移住が始まってから400日目のこの日に、こうして言葉を、エジプトから綴っています。1948年のナクバの際に、祖父母たちが避難民として逃れたように、私も避難民となり、この地に辿り着きました。

祖父がその記憶や苦しみを語っていたのを思い出します。幼少期や青年期を過ごした村から追放された時を振り返るとき、彼の目に浮かんだ涙と、胸に溜まったため息の理由を、今の私は深く理解しています。

歴史は繰り返しています。昨日、それは祖父たちの物語でした。今日、それが私の現実です。私は心から願います。私の未来が、祖国から強制的に追われることなく、子供たちに涙とため息とともに新しい「ガザのナクバ」を語ることがないように。

だけれど、どうやってあの大きな喜びを伝えたらいいのでしょうか？私が家を購入し、準備を始めたときのことです！仕事を終えて、急いで新居に向かい、自分で少しづつ作業を進めた日々のことを！インテリアのデザインを何日も考え抜き、陶器のショールームを訪ね歩き、タイルを選んだ時間を！ペンキの色や照明のデザインを想像し、夢に描いた幸せな生活のために結婚と家庭を築く準備を進めた、あの希望に満ちた日々を！私たちが築こうとした未来が一瞬のうちに奪われたことを、どのように伝えれば良いのでしょうか？

占領軍が住宅街全体を爆弾で破壊し、地平線まですべてを瓦礫に変えてしまった今、どうすれば良いのでしょうか？

以前私を苦しめ、今もなお苦しめているあの爆弾が、兄を奪った…

今、それは再び戻り、多くの友人、親戚、隣人の命を奪い、私の喜びと人生に対する前向きな姿勢をも奪い去ろうとしています。

これから先、私は生涯このジェノサイド、民族浄化の影響から立ち直ることは出来ず、それは何世代にも渡って続くでしょう。

だけれど、今の私にとって最も大切なのは、ガザの詳細な記憶が消え去ってしまうことです！毎晩、私はガザの通りやその特徴を思い出し、心の中でそこへ戻ろうとします。通りの風景やオフィス、同僚たちとの朝のコーヒーの味や朝食の料理、これらが過去の思い出だけにならないことを願っています。

そして、国際社会、いわゆる人道支援団体が、ガザにおける人道への責務を果たし、私たちの命、家、財産、そして喜びを盗むこの抑圧的な敵の口を塞ぐことを望みます！

#3 アラー・ハッジャージュ 2024年11月11日

私はガザ出身のアラー、29歳です。

私の夢はシンプルなものでした。小さな家族と暖かい家で過ごし、希望や思い出を分かち合い、平穏で静かに、安全に生きること。それだけでした。

ターリクと結婚し、4年後に神様から授かった月のように美しい娘を「マルヤム」と名付けました。私たちは彼女に健全で積極的に育ってほしいと、一緒にその環境を整えることを誓いました。

しかし、突然すべてが変わりました！

戦争が私たちの温かい家を、砂の上に張られた小さなテントに変えました。飢え、寒さ、そして四方八方から押し寄せる恐怖に囲まれています。私たちは避難民となり、夫と私は仕事を失ってしまいました！

マルヤムは昨年12月に初めての誕生日を迎え、そして今、2回目の誕生日が近づいています。テントの寒さや強いられる飢えから彼女を守れない日が来るとは想像もしていませんでした。

占領の火の手がいつ自分たちを襲うのかわからないという恐怖を常に感じながら、私たちは死から逃れるために何度も避難を強いられました。今後あと何回避難を強いられるかは神のみぞ知るところです。今や生き延びることだけが唯一の夢になってしまいました。

世界が私たちの苦しみに対して耳を塞ぎ、口を閉ざし、目をそらし続けるなら、今日このメッセージと共に届けられる私たちの声は、明日には存在しなくなってしまうでしょう！

私と家族、誰もが一瞬で忘れられてしまうような数字ではありません。

私たちは夢、希望、願いを持つ魂であり、生きるに値する存在なのです！

これが、あなたたち、世界へ向けた私からのメッセージです。

#4 アムジャド・アブー・ヤースィーン 2024年11月10日

私の最後の手紙……これが“最後”になることを願って

私は全人類の罪を背負うキリストではありませんし、全人類に及ぶ赦しの力も持つてはいません。

どうして、パレスチナ人であるというだけで、天地創造のときから運命づけられた悲劇を背負わなければならないのでしょうか。どうして、世界はすべての罪と怒りを私たちに押し付けるのでしょうか。どうしてこれが論理的なのでしょうか。

太古の昔からパレスチナ人は苦しみ、彷徨い、そして死ぬ運命にあるのです。

弱者も強者も、悪党も預言者も、誰一人として例外ではありません。

400日が過ぎ、私は苦しみの中で死を望む子どもたちを目にしてきました。子どもが「死にたい」と願うのを聞くたびに、私の中の何かが死んでいきます。また、生き延びようと必死に命にしがみつく子どもたちを目にしてきました。多くの遺体と僅かな命を目にしてきました。

世界は、私たちに起きていることに目を開こうとしません。罪悪感を持たないよう真実よりも無知を選んでいます。けれど、この言葉を見て、聞いて、読んでいるあなたがそこにいます。それは私たちにとって唯一の希望です。

数百万の星が空を照らすけれど、瓦礫の下で運命を待つ家族に光を与えることはできません。

昨年10月7日から1年どころか、何世紀も経ったように感じます。毎日毎日、この戦争が終わるのを思い描いています。その時、再び自分を「人間」と呼ぶ勇気を持てるなどを願っています。彼らは絶え間なく人間性を削るが、私は人間であり続けたいと抗っています。この苦しみを、他のどんな人々にも味わってほしいとは思いません。

数か月前、近くの学校が爆撃され、多くの人が殉教しました。今でも死と血の臭いが鼻の奥に残っています。私は他の人々と一緒に地面から遺体の一部を拾い集め始めました。数分後、校庭は人間の体の一部が積み上げられた山と化しました。数分間、私たちは地獄の中にいました。

かつて私は子どもたちの手を握り一緒に舞台に立っていましたが、それは彼らの失われた部分を運ぶためではありません。彼らの手足は電線と共に地面に散り散りになっていました。それはまるで乾かされるのを待つ衣服のようでしたが、私には不安ではなく落ち着いていました。

なぜなら、世界中のリーダーたちが、戦争は終わらせなければならないと言ったからで、私はそれを信じているからです。手や足を握ったり、死体を見たりするたびに、彼らが戦争を止めてくれると思うようになり、この一年、日に日に彼らを信じるようになりました。

パレスチナ人であることは、良いことでもあり、悪いこともあります。なぜなら、世界の真実を知っているからです。人権や世界が語ってきた価値観は、すべての人に当てはまるわけではありません。権力者が望む者だけが招待され、私たち不運な者はその饗宴に招かれてはいません。

#5 イーハーブ・アルヤーン 2024年11月8日

私はいつも静かに話していました。大小の様々な出来事にも動じることなく、私は常に感情を冷静に表現していました。誰にでも愛情を持ち、他人の幸せに喜びを感じ、地震や津波、ハリケーンや洪水、世界のどこかで起きる災害にも心を痛めること、それは私にとって特別な事ではありませんでした。

しかし、この呪われた戦争の中で、自分を受け入れることができなくなりました。持ちうる力、利他の心を人生に捧げてきたこと、すべてを後悔しています。なぜなら、いま騒音の中で家族と共に経験している物理的にも心理的にも破壊される毎日、静かな生活など何の役に立つというのでしょうか？

戦争の前、私は自分の好みに合わせて生活を築き上げていました。誰かの慈悲に頼ることなく、私を悩ますものは人生から取り除いていました。私は演劇と音楽が好きで、化粧品や香水を販売していました。音階や舞台、香水瓶や化粧品、その間を蝶のように飛び回り、自然な調和を持って生活していました。

しかし、戦争が始まり、時間が完全に止まりました！砲撃やミサイル、銃声が鳴るたびに、夢も希望も小さく縮んでいきました。私は火を起こすため木くずを集め、水を汲み、避難先を転々としながら、調和のない日々を過ごすようになりました。

もう静かに話しません。みなさんに向かって叫びます。世界中のすべての人々を暴露します。私の問題はこの宇宙、この世界、そこいる人々、善人であれも悪人であれ、すべてにあるのです。自分たちの家が爆撃され、子どもたちと一緒に埋もれることを受け入れるような世界で善など存在するでしょうか！人間性も、人権も、正義も、すべが無意味で、すべてが嘘、嘘、嘘です。私はすべての息づくものたちへの信頼を失いました。平和の象徴である鳩さえも裏切り、海の魚も必要なときに私のそばでは見つけることができなかつたのです。

あなたたちは私に「裏切られた」と感じる以外の選択肢を与えてはくれませんでした。誰もが例外なく、私たちを騙し、私たちを生きたまま虐殺することに加担しました。私たちの苦しみを喜ばなかった人は一人もいませんでした。ヤギが倒れると、誰もがそこから利益を得ようとしています。※1 見知らぬ人よりも親戚が、敵よりも友人が、我先にと。

初めて、私は敵に騙されたと感じました。彼らが犯罪者で、無慈悲で、私たちの死と拷問に飢えていて、人々の生活に同情することなくすべてを破壊し、抑圧していることは知っていました。しかし、彼らがそれほどに有害であるとは知りませんでした！！！非常に深く、非常に磨かれた恨み、何千年も前の恨みが、ガザの私たちの頭上に地獄そのものをもたらしました。世界中のすべての邪悪がガザに凝縮されたのです。

私はこんな戦争を経験するなんて、また、こんな狂った形で自分の人生がめちゃくちゃになるなんて想像もしていました。世界には憎しみ、偽善、欺瞞、裏切りがあることは知っていましたが、ここまでとは思いもしませんでした！それでも、このガザでの戦争で私たちが経験したこと、その1/4でも誰にも経験させたくないないです。

戦争の時が1年過ぎ、私はむしろ黙っている方がいいと思うようになりました。誰も聞こうとせず、誰も何も感じないからです。そして、この世界と同じように、私も無意味なことを話したい気持ちが強くなりました。世界に向け話しかけるなら、むしろ無意味なこと

を言えばいいのだと。なぜなら、この世界に対処するにはその言語が適していると感じるから！私たちが世界に向けあらゆる言語で話したときに何が起こったのかを見ました—その結果はどうでしたか？恥すべき沈黙でした！

この戦争の後、私に「この大統領や大臣を尊敬しなさい」と言わないでください。彼らは皆、臆病者です。私は臆病者と話すことに名誉を感じません。以上、終わりです。

訳注

※1 "سقوط النبي والكل بريد المربي منه" (ヤギが死んだのに、みんながその利益を求める) ということわざを用いた表現と思われる。

ことわざは、困難な状況や不幸な出来事が発生した後でも、人々がそれを利用して利益を得ようとする様子を表し、自分の利益だけを求める行為の批判、虚栄心や欲の批判する表現。

#6 ターミル・ニジュム 2024年11月11日

混乱、めまい、そして終わりのない頭痛

自分がどこにいるのか、あるいは誰なのかさえわからない。渦に巻かれグルグルと回され、それに完全に身を委ねている。甘い瞬間が痛みと混じり合い、涙を誘う瞬間もあれば、自分を見失う瞬間もある。ああ神よ、私はどこにいたのでしょうか、そしてどこに行ってしまったのでしょうか？なぜ？どうして？そして誰のために？こんなことが起こっているのでしょうか？

私の人生はこんな方程式になってしまった：私、そして私だけ。目を覚まし、眠る、けれど昼と夜との区別がつかず、毎日が同じように繰り返されていく。雨が降り、風が私をどこかに運んでいく。安全な場所に行けることを願っていても、そんな場所は今や遠く離れてしまい、その道のりにも疲れ果て、自分自身さえも重荷に感じている。

私は自分に負荷をかけ、自分を恥じ、人々を煩わせ、愛する人々を傷つけた。そして、学んだことは、輪が狭まるほど、物事は純粋になるということ。多くを持つことはただの負担であり、ときには一人でいる方が良い。けれど私はこうも思う。<これは夢なのでしょうか？それとも終わらないエイプリルフールのジョークなのでしょうか？> まるで隠しカメラで撮る番組の中に生きているよう……お願いだ！もう十分だ！私たちは抑圧され、静かに死に、誰にも気づかれない。気づいてくれる人がいても、何もできない。私たちは悲しみに打ちのめされ、細かいことについて考えることはもう無意味なのだとと思っている。

あなたは、テントとは何を意味するのか知っていますか？知らないいないと思う。教えます。テントとは、寒さを意味し、ゆっくりとした死、そして途絶えない飢えを意味するもの。テントとは、10人で狭い空間に寝ること。半分が中で、半分が外で。虚無の淵に残された人生の名残のようなもの。朝は太陽があなたを焼く熱さで目覚めたり、ハエが体を噛む感覚で目覚めたり、夜には寒さが刺し、人生の暖かさを忘れさせる。

テントの中には秘密がなく、全員が互いにさらけ出されている状態で、一つの家族のように分かち合うしかない。だが毎朝、パンと少しの水を手に入れるため、生存のための戦いが始まる。ここにいる者は安息というものを知らない。一つの苦い夢を共有する一つの民族になってしまったようだ。毎日は新たな物語であり、新たな喪失であり、新たな募る渴望、そして痛みの連続だ。

これは私たちをさまざまな場所や状況に振り回す竜巻のようで、どの場所でも新たな衝撃がもたらされ、もはや理解できないほどだ。毎日、新たに抱く希望は蜃気楼のように消えてしまう。私たちは裸同然の体、空っぽの胃袋、疲れ果てた心と傷ついた心を持つ存在になってしまった。

時間が経つにつれ、希望は死に……そして、私たちを独り残した……

#7 ラワンド・ジャアルール 2024年11月11日

いつも朝は奇妙な痛みから始まる—それは隔たりと孤立の痛みです。私は自由でありながら囚われているような、魂がどこか手の届かない場所に住んでいるような感覚に襲われています。毎朝、爆発音、画面越しに届く私を揺るがすニュースに目が覚めます。ですが、最も心が碎けたのは2023年12月16日土曜日でした。

私はいつものように家族の無事を確認しようと電話をかけました。家族の声は私の心を落ち着かせてくれます。ですがその日、電話から届いたのは安堵とは程遠いものでした。悲鳴や泣き声、恐怖による混乱が耳を刺しました。何が起きているのか必死に理解しようとすると、涙にむせぶ母の声が聞こえてきました。

「爆撃されたのよ。お父さんが……目を覚まさないの。神様、彼をお守りください。」

父の頭部の怪我は重篤なもので、動けず、話せず、記憶を奪われてしまいました。かつて強かった父が、反応しない体に閉じ込められ、愛する人々を忘れた存在へと変わってしまった。

毎日の電話は重くのしかかります。無事を確認するために電話をかけますが、本当に無事な人などいないとわかっているのです。

覚えておいてください、今起きていることは単なるニュースではありません。それは人々の生活であり、子供たちの夢であり、平和な日を渴望する父親や母親の希望なのです。戦争は避けられない運命ではなく、平和は実現不可能な夢でもありません。私たちは、この痛みを感じ取ってくれる心が存在すると信じています。

どうか、私たちとその家族のために、あなたの希望と祈りの一部を分けてください。そうすれば、この世界はより公正で人道的な場所になることでしょう。

#8 リハーム・ヒッジャージ 2024年11月13日

避難生活を送っていると、人間としての最も基本的な権利への憧れと郷愁が募ってくるのです。私は南部のほぼすべての地域に避難しました。そのたびに適応しようと努力しても、想い出や在りし日々が私を打ちのめすのです。避難するたびに新しい人々に出会い、その人柄に触れ、まるで一つの家族のように生活を共有します。そこにはプライバシーというものは存在しないのです。

占領者は私たちを放っておらず、食べ物や飲み物を通じて私たちを苦しめます。私は素朴な食事を恋しく思います！かつて"コーチ"と呼ばれ、重りと鉄を持ち上げていた私が、今ではパン屋に水のバケツとトレイを運ぶ日々を送っています。なんとか適応しようと努力しています！

今こそ、この容赦ない占領に世界が立ち向かう時ではないのですか？

人道はどこにあるのでしょうか？

良心はどこにあるのでしょうか？

アラブの連帯はどこにあるのでしょうか？

答えてくれる人はいるのでしょうか？

#9 サーミー・アル=ジャルジャーウィー 2024年11月12日

私はガザに暮らす父親、サーミー・アル=ジャルジャーウィーです。家族と共に安全と安定を求めるだけ、生き延びるために懸命に努力しています。

私は愛するガザ地区の中心部出身で30歳です。私の人生は、誰もが安定した未来を築こうと夢見るのと同じようにゆっくりと進んでいました。しかし昨年、戦争がやってきて、私の人生の歩みを完全に変えてしまいました。

2023年10月9日。この危機の中で、私は小さな娘を授かるという祝福を受けました。彼女はロケット弾の音と砲撃、破壊と破滅の中、生活の最も基本的な要素すら欠けている時代に生まれました。彼女は、どんな過酷な状況でも希望は死がない、と教えてくれるために生まれてきたかのようでした。しかし、彼女の誕生を夢に見ていた形で祝うことはできませんでした。

私たちが愛を込めて何年もかけて建てた家は、完全に破壊され瓦礫と化してしまいました。残されたものはテントだけ — 冬の寒さや夏の暑さから私たちを守ることができません。私たちはそのテントで、食料、薬、そして生活必需品が極度に不足した、生存には適さない厳しい環境の中で暮らさなければなりませんでした。

私たちは毎日テントの中で新たな課題に直面し、生き延びるために奮闘しながら、私たちの生活を取り戻し、小さな娘により良い未来が与えられる希望を待ち続けています。

妻のスライヤーは、修士号を取得するために一生懸命勉強していましたが、戦争の混乱と安定を失った暮らしにより、その夢を諦めなければならなくなりました。私は失業し、収入源を失いました。今はあらゆる助けを切実に必要としている時です。

今日、私は家族の物語を背負っています。痛みと希望の詰まった物語です。そして、助けの手を差し伸べてくれる人を見つけ、安全と安定を取り戻せることを願っています。

#10 スジュード・フセイン 2024年11月11日

ガザ市民の運命は、疲弊と苦しみ、長く続く困難な日々を生きることだった。それでもなお彼らは、正常な日常のようにしようと努力し、その終わりに平穏なひとときを、と願っていた。しかし、その願いは石も人も区別しない残酷な戦争によって打ち砕かれた。2023年10月中旬、多くのガザ市民は家を離れ、占領軍が「安全地帯」と指定した地域へ向かった。私と家族、叔父や叔母たちもガザ地区南部のハーン・ユーニスへ。空爆、軍用車両の進撃、飛行機の轟音、そして避難所への爆撃の中を命賭けの移動だった。

生き延びる術はなく、ただ安全を求めるのみ。最初のうち、私たちは「明日には戻れる」と自分たちに言い聞かせた。必要なもの—服、食料、寝具—が足りなくなると、「家にはこれらのもののがたくさんある。明日取りに戻る」と言った。恐怖や不安、そして寒さの中で、私たちは長い夜を過ごした。地面に毛布を敷いた即席のベッドで眠りながら、これは一時的なものだと信じていた—それは約2か月続いたのだった。

親戚の100人以上が同じ厳しい現実を共有していた。朝になると、火を起こし、すすで黒くなる料理を作り、土で作ったオーブンでパンを焼いく。マットレスで眠ることができたとき、初めて本当の「眠り」を知った思いだった。平穀や静けさを忘れ、失ったものすべて嘆くプライベートな時間すらない。私たちには自分たちの状況に抗議する余裕はあるはずもない。祖父母から聞かされたナクバの物語を体験し、生きることの苦しみを味わった。この苦しみはいつか過ぎ去るだろうと考えて、自分たちを慰めていた。

しかしその数日後、占領軍は避難所の全避難民に、ここは危険な戦闘地帯だと宣言し、ハーン・ユーニスを離れてラファへ移動するよう命じた。「人道回廊」と呼ばれる道を渡るとき、言葉では言い表せない屈辱に耐えた。戦車の間を歩く恐怖、兵士の嘲笑う視線、家族と離れ離れになる恐怖、わずかに持っているものを失う不安—それは絶望の瞬間だった。私たちは涙だけを携えてハーン・ユーニスを去った。涙が心を覆い尽くすまで泣き続けた。私たちはテントでの生活を始めた。その最初の夜を言葉では言い表せない。天気は雨、私はテントが水浸しになるのを想像し、それにどう対処するか考えながら過ごした。

一睡もできなかった。あまりに多くの疲れ果てる日を過ごして、快適な眠りを切望していたけれど、私の思考は私に休息を与せず、悲しみもまた私を解放してくれなかつた。

心は二つの苦渋の選択肢の間で引き裂かれていた。自分を救うために去るべきか、それとも家族と共に戦争の中に留まり、結婚を戦争後まで延期するべきか。去ることが救いになると思った。すべてが破滅を示しているように感じたから。

長い月日が過ぎ、2024年3月、私は涙で頬を濡らしガザを離れた。私は母に、父の死後、私たちを育てるためにすべてを捧げ、人生の困難に立ち向かい、私たちがより良い人間になるのを見守ってきた、優しく献身的な女性に、別れを告げた。私たちの功績に誇りを感じ、その目が輝き始めたとき、戦争がその光を奪い、母の体を蝕み、顔に消えない苦労の跡を刻んでいった。母に別れを告げながら、彼女の腕に溶け込んでこの残酷な世界に戻りたくない、私はそう願った。

私は生涯愛してきたガザを記憶に留めエジプトへ。運転手がウンム・クルスーム^{※1}の曲を流す中、カイロの明るい街灯を目にしたとき、ガザの映像が頭に浮かんだ。ガザはどの都市よりも美しく、壯麗。それがどうしてこんなにも灰色になったのか?ウンム・クルスームの声を聞くと涙が溢れ、思い出が押し寄せた。彼女の歌はいつも友人たちとの会話の一

部だった。音楽の代わりに彼女の歌について語り合ったり、友人たちの話を聞いたり、私の話をしたりした。

私は頻繁に会っていた友人たちにすら別れを告げられずガザを去った。何年も、どのように別れを告げ、どのように再会するかを思い描いていたのに、戦争は旅立ちの障害となり、想いを台無しにした。いま、私に友人がどれほど必要で、どれほど会いたいと思っているのか — 母、姉妹、友人、そして思い出への渴望を世界は理解しているの？

スマートフォンに保存された写真を見ながら泣き、そして笑う。それらが今や私が持つすべて。写真ごとにそのディテールが蘇る。なぜその場で友人と会ったのか、何について笑い、泣いたのか、そして世界からは乗り越えられないと思われている困難の数々を、人生が私たちにどのように与えたのか。なぜ私たちは、ありふれた危険に直面するのではなく、戦争という大きすぎる服を着せられたの？拒む権利すら奪われたのはなぜ？

私はまだ若い、人生の経験もある、と自分に言い聞かせている。しかし、美しいガザやチャンスに満ちた人生を知らないまま、戦争に目覚めた子供たちもいる。私はそれらを経験した自分を嘲笑う — なんて“祝福”された人生なのでしょう！誇らしい！

世界中の人々は私たちよりも多くを持っているのに、私たちが持つには少しの物でさえ多すぎると感じていた。子どもたちには尊厳ある人生、教育、健康、喜び、旅する権利があり、彼らは他の地域の子どもたちに劣らない — いや、むしろすべての困難に立ち向かうのがこの世代の本質だ。私にとって、ガザはその若者たち、子どもたち、女性たちと共に、すべてを超えて美しい世界の女王であり続ける。

今、私は家族や友人から遠く離れ、疑問、不安、恐れ、孤独と共に一人で暮らしている。恐怖は戦争に劣らぬ怪物で、生存は幻想であることを学んだ。ニュース、物音、家族への電話が繋がらないこと、近くで起きた爆撃の緊急報告が怖い。友人たちがオンラインでいる長い時間 — ガザでは通信手段が乏しいため、これは通常のことですが — それが嫌で、恐ろしくてたまらない。こうした困難で不安な状況は世界には知られていない。母が話してくれたように、彼女たちが耐えてきたことに比べれば、自分の経験はほんの僅かだと思うこともあり、母がそのような苦難に耐えていたことを想像すると、怒りが私を蝕み、心が震える。

これらの恐怖とガザでの辛い夜の記憶が、私を怒りっぽく、口が悪く、反対意見に寛容でない人間に仕立て上げた。誇りと称賛の気持ちを込めて語られない限り「ガザ」という言葉を聞くのが耐えられない！反対意見を無視し、拒絶する。以前の私は、あらゆる意見を受け入れ、どんな視点にも心を開いていた — まるで別人だ。戦争は私を変え、私を奪った。

私たちが経験し、考え、目撃したことは、どれほど話しても説明するのは困難なもの。これは、世界によって残忍な占領に直面するよう投げ出され、他者の非人道性を満足させるために神話の存在に作り上げられたガザの人々の特異な経験なのだ。いつの日か、ガザの人々は世界に向かって叫び、平和を取り戻すことだけに心を配るだろう。世界はその叫びに備えなければならない。長い孤独の果てに起きた結果について、ガザの人々を責めてはならない。

訳注※1 Umm Kalthoum / أم كلثوم (1898-1975) エジプトの歌手。もっとも知名度が高く、また人々からもっとも愛されたアラブ音楽界の伝説的存在

#11 ムハンマド・カースイム-2024年11月15日

「誰も気にしないし、誰も何も感じない。」

これは、2010年に私がモノローグで最後に言ったセリフです。

かつては人々の心が和らぎ、誰かが気にかけてくれると信じていました。しかし今ある現実は、嘘、偽善、見せかけで満ちた臆病な世界、その醜い真実を明らかにしました。

私は、美しいものを書きたいと願っていました……苦しみの後の美しい言葉を……私の国が抑圧、人種差別、迫害に耐えてきた苦しみ。私たちの人生は移住、災禍、挫折、そして飢餓と言った暗い出来事で埋め尽くされています。

私たちには、一瞬たりとも生きる権利がなく、この世界には若者、青年、誰であろうと、この地球を歩く人々に等しく権利がある、と感じる権利さえないのでしょうか？

私が国を離れる決断をしたとき、それは困難なことでした……とても困難でしたが、包囲の闇が増し、人々から笑顔が消え、笑い声が消えていくのを感じ、私はこう思いました。「迷子になる前に、今すぐ出発しよう。」別れは胸を焼き、亡命は心を焦がし、そして母の心……ああ、それは辛かった。末の息子が長く離れてしまい、孫たちが走り回るのを見る夢が叶うことなく人生が終わってしまうのではないかと恐れています。しかし母は、私が彼女と思う気持ちが、彼女が私と思う気持ちよりもはるかに強いことを知りませんでした。

2016年にモロッコに到着してから、ガザでは二度の戦争がありました。前回は2022年でした。ガザでは2年ごとに戦争が勃発し、状況は悲惨です。爆撃が続き……神の許す限り、打つ、叩く、打つ、叩く。

戦争中、家族と話すと彼らは冷淡にこう答えます。「大丈夫だよ… 私たちは平気だ。」ロケット弾が彼らに降り注ぐたびに、私は「どうか神よ、彼らを守ってください」と祈ります。一般的には人々は亡命中に子供を心配しますが、私は故郷の愛する人々を心配しています。

10月7日以降、私は悪夢の中で生きています。「神よ、目覚めさせてください」と願いますが、この悪夢は時間の経過と共にますます悪化し、ガザの悪夢が現実なのだと悟りました。私たちはそれを見て、感じて、人々はそれを生きています。

家族と話すたびに、私は無力さを感じます。彼らのために何もしてあげられません……彼らはいつも私に聞きます。「私たちはどこに行けばいいの？」

人々は走っています。子供を抱えている人もいれば、母親を背負っている人、マットレスを持っている人もいます。誰もどこに行くべきかわからないけれど、遠くに行けば行くほど安全だと感じているのです。

私は家族の避難を追い続けました。アル・サフタウイーからビーチへ、ビーチから国連学校へ、国連学校からシェイク・ラドワンへ、そしてシェイク・ラドワンからアブー・イスカンダルへ。避難のたびに、恐怖と戦慄に満ちた物語がありました。ある日、私は世界が暗転したかのように感じました。3日間、家族に連絡が取れず、ガザが消え去ろうとしていると感じました。彼らは生きているのか？ 目を覚ましているのか？ それとも眠っているのか？ 食べたり飲んだりできているのか？ 思いは浮かんでは消えていきました。夜が昼にな

り、昼が夜になり、眠れず、食べることもできず、囚人のように部屋に閉じこもっていました。

夜、電話が鳴りました……妹からの電話でした。「私たちは無事よ。」

私は喜びのあまり泣き、狂ったように家中を跳ね回りました。彼女の言葉を信じるために、みんなと話をしました。

電話が終わった後、彼女らの無事に安心したはずなのに落ち着かない気持ちが残りました。それから少し経ったある日、また夜中に電話が鳴りました……私が一番嫌いなこと、それは夜中の電話です。

「もしもし… 何があったの？」

妹が答えました。「脳卒中の症状って何か、ネットで調べて。」

私は驚いて、聞き返しました。「どうして？ 何があったの？」

「お母さんの目が虚ろで、言葉がうまく出てこなくて……夜の12時なのに周りは砲撃ばかり、救急車はないのに、家のまわりには戦車がいるの。」

その瞬間、私は打ちのめされました……誰かに手足を縛られ、口を塞がれているようでした。母が腫れた目で呼んでいるのを想像しながらも、無力で、弱く、何もできない私がいました。

私にできたのは訴えかけることだけでした。

「もし、血があなたの心を動かさないとしても、せめて私たちの訴えに耳を傾けてください、目を向けるだけでもしてください。私の母は祖国の一部であり、祖国は救急車を必要としています。この国を救いますか？ それとも、他の多くの国々のように、目の前で死んでいくのを見届けますか？ 国は痛みに耐えつづけ忍耐強くありますが、残りはあなた次第です。私たちの祖国が消えてしまう前に、良心を呼び覚ましてください。」

私は確信しています。何を言っても、どれだけ話しても、誰も気にしないし、誰も何も感じない。それでも私は訴え続けるしかない。

#12マフムード・アブー・シャアバーン-2024年11月9日

喪失というのはとても辛く苦しいもので、経験した人以外誰もそれを本当に理解することはできないでしょう。母、父、兄、姉、その夫、その子供たち、そして孫を一日で失う—それはあまりにも痛ましく、誰も耐えることなどできません。家族の温もりや優しさ、その声、彼らに関するすべて、大切な思い出さえも失ってしまう。更には、彼らが埋葬された墓や家までも失い、そこに行って彼らに会うことすら叶わないのです。

私は、いつもそばにいてくれた愛情深い母と父が恋しいです。私が悲しいとき、嬉しいとき、何かが必要なとき、いつも隣にいてくれました。どんな瞬間も分かち合ってくれたのです。私は兄が恋しいです。彼は兄以上の存在で、いつでもそばで私を支え、あらゆる困難を共に乗り越えてくれました。優しい姉も恋しいです。彼女は第二の母のような存在でした。家族全員を失うということが何を意味するか、わかりますか？

2023年10月18日、私は家族がいる姉の家の攻撃されたという知らせを受け取りました。その瞬間、私はどうすればよいのかわからませんでした。無力で、ただ電話をかけることしかできませんでした。当然、誰も応答しません。私は恐怖で震え、家族が無事であるようにと神に祈りました。その地域に住む親しい友人たちに連絡をして、誰か様子を確認しに行けるか尋ねましたが、誰も何もできませんでした。近くに住む叔母に連絡をすると「家ではなく、家の裏が攻撃された」と言われ、彼女は私を落ち着かせようとしてくれました。少し安心しましたが、恐怖は消えず、私を支配し続けました。親戚に次々と電話をかけましたが、誰もが異なる情報を伝えてきました。負傷者がいると言う人もいれば、私を安心させようとする人もいました。そして6時間後すべての通信が途絶え、誰からの連絡もなくなりました。

更に数時間が経ち、叔母がなんとかその地域に到着し連絡をくれました。そのとき衝撃が私を襲いました。叔母は一人ひとり家族の名前を挙げながら「殉教した」と伝えたのです。不幸にも、私は大切にしていたすべてを失いました。しかし、占領はそれだけでは終わらなかったのです。

彼らを埋葬した数日後、埋葬地がブルドーザーで破壊されたという知らせを受けました。そして、占領はそこでも止まりません。数週間後、今度は私たちの家が地面に押しつぶされたと知らされました。その家は私が生まれ、子供時代を過ごし、人生と甘い思い出そのもの。その隅々が私の心の特別な場所を占めています。

私は自分の体験を皆さんに話しましたが、私が経験している痛みや悲しみを本当に理解できる人は誰もいないと思います。

今日に至るまで、私は戦争が終わるのを待っています。家族の無事を確認したい、今でも家族からの電話を待ち続けています。彼らがとても恋しいです。私は結婚して、家族を喜ばせたいと夢見ていました。特に父を喜ばせたかった。父は私が幸せになるのを心から望んでいました。子供に父の名前をつけたかったです。父はとても誇りに思ってくれたでしょう。家族に最後に会ったのは2023年6月で、その時が私の人生で最も幸せな時間でした。何年ぶりかで、私を含め兄弟姉妹全員が両親と一緒に過ごせたからです。両親は私たちに会えてとても喜んでいました。私が旅立つ前、両親は私にこう言いました。「神のご加護があれば、次に来たとき一緒に喜び合おう。」しかし、戦争は私のすべて、最も大切な人々を奪いました。

家族がまだ生きていたら、彼らの承認を得て結婚して、彼らを喜ばせ、彼らに心から尽くしたい。そして、こう伝えたい。「あなたたちは世界で一番大切な私の家族、心から愛しています。」

#13マフムード・アル=バルアーウィー-2024年11月19日

世界中の自由な人々へ、すべての人間たちへ！！！

もうこれ以上、不正義は十分だ。死はもう十分だ。沈黙ももう十分だ！！！

私のメッセージは、心の中にほんの少しでも人間性を持つすべての人に向けたものです。ガザのことは耳にしていると思いますが、状況が言葉では言い表せないほど過酷なものであることを理解してほしいと思います。この戦争は単なる爆撃の話ではなく、流血の話でもありません……私たちへの戦争はジェノサイドなのです。これは無慈悲な戦争であり、私たちの一人ひとりを殺し、誰の区別もありません。

私はいくつもの爆撃から生き延びました。家が爆撃され、別の家に移動しましたが、その家も爆撃され、私たちはテントでの生活となりました。24時間、死の脅威の中で生活する、それがどんなものか想像できますか？

もう耐えられない。私たちは疲れ果てた！心に少しでも人間性を持つすべての人に、戦争を止め、この流血を止めるよう求めます。私たちを殺すのをやめてください。私たちは人間です。私たちは世界の他の人々と同じように生きたいのです……あなたと同じように！

ニュースで流れる単なる数字ではありません。画面に映る単なる画像でもありません。私たちは人間です。私たちは家族であり、子どもであり、母親であり、愛する人を持つ人間です。

果てしない地獄の中で生きています。私たちにとって戦争とは、決して離れない黒い影のようなものです。それはすべてを破壊します。それは大切なもののすべてを奪い去ります。私たちの人生のすべての瞬間が今や危険にさらされています。

私たちは爆撃の下で暮らしているだけではありません。封鎖の中で生きています。いとこや友人、家族、親戚、そして殉教した、あるいは傷ついたすべての人々の痛ましい記憶と共に生きているのです。

最終段階にいます。私たちは完全に抹殺されるのを前に、なんとか息をつかなければなりません。

このメッセージが届き、あなたたちが助けに来てくれることを願っています。

#14 マフムード・アッ=トルク-2024年11月13日

ガザ戦争2023/2024に関する世界へのメッセージ

私たちはまだ生きています。しかし、私たちの中のすべては死んでしまいました！

昨日、私は生きていて、三十歳の若者が抱く希望と夢を持ち、無限の成果に満ちていました。しかし今日、その夢は奪われ、その野心は殺されました。残っているのは、眠ることなく常に私を苦しめる記憶だけ。私たちは温かく美しい家を追われ、先の知れない道へと追いやられました。そして今では、夏の暑さや冬の寒さから守ってくれるものが何もない貧弱なナイロンで覆われたテントで暮らし、生活に必要な最低限の物すらありません。私は今、古代原始人のような生活をしています。木や火を起こすためのものを探し集め、火と煙の傍らに座りパンを焼き、空腹をしのいでいます。

誰か1日、1カ月、あるいは1年間、日常の苦しみが10倍にも膨れ上がった形で生きることを試した人はいるでしょうか？ガザで生きるということは、あらゆる形で倍増した苦しみに耐えること意味します。恐怖、爆撃、屈辱、幾度もの避難、そして別れの言葉も告げられないまま家族や友人を失うこと — 彼らが生きているのかどうかも分からるのは、無理やり引き離されたからなのか、それとも戦争がすべてを奪い、心を引き裂いたからなのか。

私たちは想像すらしなかった物語を目の当たりにし、それは歴史を未来の世代に語り継ぐ映画や物語になるでしょう。そして、あなたたちはその証人です。私たちは安心と安全の感覚を失いました。私たちの顔は早々に老け、青白く、疲れ果て、人生の痛みが刻まれています。

今、私たちが考えること、夢見ることは、破壊された家に戻ること、その灰色の瓦礫の上で生きること！私たちは世界にこの声が届いているか、確かめるための言葉がほとんど残されていません。どうか私たちを忘れないでください、孤立させないでください。私たちは死者数の統計上の数字ではありません。私たちは人間です。あなたたちと同じ人間です。命を愛し、信じ待つ希望があり、平和と安全の中で生きる権利があります。そして、終わりのない戦争の連鎖を止める権利があります。

ふと、自分自身に問いかれます — 私は誰なのか？

どうしたらこれほどの出来事に耐えられるのか？

#15 マフムード・ナジュム-2024年11月11日

私はマフムード、包囲されたガザの住民の一人です。戦争で家も夢も破壊され、子どもと共にテントで暮らしています。苦しみと痛みの中で、爆撃音と破壊音の中で、この言葉を書いています。子どもの目を覗くと、そこには私が答えることのできない問い掛け、安心というものを知らない恐怖、そしてどうにかして生き延びようとする希望が映っています。

ガザは単なる場所ではありません。私たちが愛する故郷であり、平和と安全の中で生きる姿を夢見る地です。このメッセージを私の声を聞くことができるすべての人に向けて送ります。思いやりある人々よ、良心を持つ人々よ、どうか行動を起こし、私たちを救い、この苦しみを終わらせる手助けをしてほしい。私たちは人間です。尊厳を持って生きる権利があります。安全に暮らす権利があります。そして、我が子へふさわしい子供時代を与える権利があります。

私の声とガザに住むすべての人々の声を届けてください。平和への努力を支援し、悲しみで疲れたこの地に希望を取り戻してください。私たちは痛みの真っ只中にあって、人間の良心と正義はいかなる戦争よりも強いと信じています。どうか、ガザを救って、子供時代を救って、そして未来を救ってください。

#16 ヒバ・ダーウード-2024年11月19日

魂の抜けた体のようだ！

戦争が始まる前、私の人生は言葉で言い尽くせないほど完成されたものでした。小さな家族があり、愛に溢れ、まさに私が夢見ていた生活そのものでした。愛する夫とともに築いた家があり、キャリアにおいても望んでいた目標に到達していました。

しかし、私は1年以上も続く悪夢からまだ目覚めることができていません！

すべてを失いました。それは私たちの家が爆撃され、夫の父と兄が殉教したことから始まりました。そして、夫は重傷を負い、1か月間意識不明で非常に深刻な状態でした。この悪夢から立ち直る間もなく、心の支えだった私の妹、その夫、そしてその子どもたちを失いました。

この痛みに抗おうとしました！最も身近な人たち、私の家、すべてがなくなり、それでも責任を背負うために強くならなければなりません。私は2人の子どもを抱え、負傷した夫を支え、この残酷な世界と闘わなければなりませんでした。

避難中、私たち家族は4回も爆撃に遭い、それを奇跡的に生き延びました。最後は私たちがいるときに避難先の家を爆撃されました。放り出された私は負傷した夫を連れ、2人の子どもと共に南部へ歩かなければなりませんでした。それは私の人生で最悪の瞬間、最悪の体験でした。崩れ落ちそうになりましたが、子どもたちを守るために立ち上がらなければなりませんでした。子どもたちを抱きしめ、戦車や兵士の海の中を歩きました。誰一人として慈悲の欠片もありませんでした。半分ほど進んだところで、彼らは白リン弾を私たちに降らせ、私たちは窒息しかけました。私は子どもたちを抱きしめ、守るために必死に走りました。

南部にたどり着いたものの、住む場所も衣服も食べ物も、何もなく、状況は壊滅的でした。夫は命に関わる怪我を負っているため、緊急の手術が複数必要でした。苦しみながらも努力を重ねた末に、エジプトへの渡航が叶い、彼は耳の手術を受け、危機的な状態を脱しました。その瞬間、少し休めるかと思いましたが、それ以来、一度も休息を得ることはできていません。

眠ろうとするたびに、出来事が脳裏に蘇り、涙を流してしまいます。眠ることができても、悪夢を見るばかりです。

そして、私を本当に打ちのめし、これまでのすべての喪失を些細なものに感じさせる最大の喪失が訪れました。父が戦争のせいで亡くなったのです。父は癌を患っていましたが、治療ができず、癌が体中に広がり、そして亡くなりました！最期まで強い人でした。

その瞬間、私はこの世のすべてを失ったように感じました。そして、もう私に影響を与えるものは何もないという境地に到達しました。簡単に言えば『感情は消え去ってしまった』ということです。

今、私はエジプトにいます。子どもたちと夫のために生きようとしていますが、魂の抜けた体で、人生に対する情熱もない—戦争が私から人生を奪ったのです。

#17 ヤスミーン・ジャアルール-2024年11月13日一

季節は巡りましたが、私たちはその風物詩を楽しむことはありませんでした。冬にはオレンジを食べず、夏には港で焼きトウモロコシを買うこともありませんでした。オリーブの実さえも収穫されず、戦車のキャタピラに押しつぶされました。大地は母の墓の上に花を咲かせることはませんでした。春は恐怖の中で隠れ、瓦礫の下に葬られてしまつたのです。

「みんな無事です、心配しないでください。彼らを救出しました。今は避難所の学校にいます。落ち着いてください。ただ、サルマーン、ナジャーハ、彼女の夫マフムード、彼らの息子ルアイと幼い娘のワルダ、アシール、アナス、バクル、アブ・アナス、アブ・アブ・ジャラールと彼の母、アフマドと幼い息子のウサーマ、アリ、アブ・ハサンとハサン、ザキーヤ、マナルと乳飲み子の息子アミール、彼らは殉教しました。」

「みんな無事です」それは、安心させるための嘘。サルマーンの妻、ナジャーハとマフムードの子どもたち、アナスの両親、それから……。

本当に彼らが無事ならよかったですのに。実際には彼らはバラバラの状態で瓦礫の下から引き出され、一時的に埋葬をされたのです。そう、仮のお墓ということです！

驚きましたか？

説明します。私たちは墓地に行って埋葬することはできません。彼らは校庭や病院の敷地、街角や路地に埋葬されました。

弾圧と暗闇が終わったとき、私たちは彼らを掘り起こします。彼らを掘り起こし、別れの苦しみ、心の悲しみ、そして帰還と再会への希望の喪失を新たにすることでしょう。彼らの死による痛みが彼らの旅立ちとともに消え、前に進んでいけたらいいと思っています。

そのあと、何が起こるのでしょうか？

北部では飢え、南部では渴き、避難所のない亡命者たち。他に類を見ない現実。あちこちに散乱しています。

安全もなく、平和ない。

至る所のある追放。

いつまでこれが続くのでしょうか？

変化は不可能なのでしょうか？

そのあと、何が起こるのでしょうか？

毎晩、重荷に押しつぶされ、暗い不安に染まり、悪夢うなされる枕に寄りかかり続けるのだろうか？

そのあと、何が起こるのでしょうか？

変化は不可能なのでしょうか？永続は不可避なのでしょうか？

私たちは苦い真実の中で彷徨い、離れない思考に悩まされ、一日の重さに押しつぶされています。

指導者たちよ、私たちの魂は老い、若き香りは枯れ、顔は青ざめ、悩みに満ちています。

神よ、私たちはこの悲嘆と絶望を訴えます。
神よ、私たちはこの弱さと疲労を嘆きます。
神よ、私たちはこの暴虐と不正を叫びます。
私たちは、行く末とその結果をあなたに委ねます。

そのあと、何が起こるのでしょう？

心はもはや人生を望んでいない。その渴望は消え去りました。私たちはただ、霧が晴れ隠されていた光が目を刺すのを、長い間待ち焦がれています—1年以上も。その光によって目にするものは、私たちの魂を痛めることでしょう。

私たち一人ひとりが、文学作品のページに収まりきらない物語、どのように生き、何を見て、どうやって生き延びたのか、その全てが記された物語を抱えています。私たち一人ひとりが人生を覆されました。しかし、戦争は終わり、日々が私たちを再び結びつけてくれるでしょう—もし私たちが天に昇らなければ。これが、私たちの神への信仰であり、確固たる信念です。

#18 ヤスミーン・カーティベ-2024年11月19日

こんなにちは。私はヤスミーン・カーティベ。小さな夢をたくさん持ちながらも、神が私のために特別な物語を用意していたため、それを叶えることができなかった少女です。

私はヤスミーン。心が強く、何も恐れない少女でした。死、それは避けられないもの—それはやってくる、そうやってくるもの。私にとって大した問題ではありませんでした。

しかし今、私の人生は180度変わりました。心が些細なことで揺れ動くようになり、私は臆病なヤスミーンになりました。理由は私が母親になったからです。母親になるということ、それは私の人生を変えました。

2021年の戦争ではリマール通りにあるアル・ショルーク・タワーが爆撃されました。私はそのすぐ向かいに住んでいました。破片がキッチンに飛び込んできて、家のガラスが粉々になりました。最愛の息子スフヤーンは恐怖で震えていた—彼はまだ1歳でした。

その恐怖を経験した後、私たちは別の場所に移りました。義理の両親が9日間私たちを受け入れてくれました。しかし、爆撃は止まりませんでした。私たちがいたアル・カンズ通りも攻撃されました。そのとき私は夫の目を見つめ、スフヤーンを託す約束を交わしました。自分が生き延びられるかわからない状況で、子どもを託すしかない—私の人生で最も辛い瞬間でした。

停戦後、夫と私は母の母国であるロシアに行くことを決めました。国籍を取得し希望を持って祖国に戻るつもりでした。ロシアに到着すると、少なくとも安全であることに安堵しました。しかし、亡命生活の難しさ、なじむことができない苦しさ、居場所がないように感じることが私たちを悩ませました。私たちは「必ず戻れる」と信じて、自分たちを慰めていました。

しかし、2024年10月7日以降、私たちの夢はすべて崩壊しました。そのとき、私は第2子の息子ユースフを妊娠しており、出産を控えた9か月目でした。ニュースに涙が止まらず、夫は私がバラバラになった遺体や破壊された家を見ないようにスマートフォンを取り上げました。戦争の最初の月、私の家族が住むパレスチナタワーが爆撃され、私は息ができませんでした—酸素が尽きてしまったのです。私を救ってくれたのは、3歳になったスフヤーンでした。息子は私を抱きしめ、再び呼吸できるまで支えてくれました。夫は「家族は大丈夫だ」と私を安心させてくれました。「みんな大丈夫だよ。心配しないで。電話をした、みんな無事だよ」と彼は言いました。

それでも、なんと言えばいいのか、家族がガザ北部に残り、夫の家族も他の多くの人々のように避難していなかった。

通信が途絶え、連絡が取れなくなったとき、私が感じた恐怖は言葉では表せません。その後、ジャバリアでの虐殺が起こり、私たちは夜も眠れなくなりました。感謝すべきことに義理の家族は命を守られましたが、家は破壊され、別の場所に避難するしかなくなりました。その後しばらくして隣の家が爆撃され、壁が崩れ、今度はアル・ナスル学校に再び避難しなければなりませんでしたが、その学校も彼らがいる中で爆撃されました。夫の弟サルマーンは爆撃の衝撃で吹き飛ばされました、11歳でした。

ガザには安全な場所はどこにもありません。それでも彼らが生きていることに感謝します。私の心は常に、ガザで麻酔も適切な医療設備もない中で出産している女性たちに思い

を馳せていました。アル・ナスル病院で子供たちに起こった悲劇は誰もが知っています。不眠症に苦しめられました。イスラエル軍がアル・シファ病院に侵入し、虐殺が行われる可能性を考えずにはいられませんでした。もしそのとき自分も陣痛中で、アル・シファ病院で出産していたらと思うと、そのことが私の頭から離れませんでした。

私の愛する母はラファにいて、多くのロシア人と共にロシアへの避難を待っていました。母は検問所にいて、私は出産のため病院にいました。この状況に一人でいるのがとても怖かったです。しかし神のおかげで、無事に息子のユースフを出産できました。彼は私の人生の光です。母に電話でそのことを伝えると、母はこう言いました。「ヤスマーン、ごめんなさい。まだ避難できていないけれど、たぶん明日にはできるはず。頑張って、薬をちゃんと飲んでね。すぐにあなたのそばに行くから。」その言葉を聞いて涙が止まりませんでした。戦争の真っ只中を検問所で過ごしている母が、私のことを思ってくれていると知ったからです。私は愛しい母にこう伝えました。「ママ、私、赤ちゃんを産んだよ。」

もちろん、ガザの誰もが私が出産したことを知っていました。私は1週間病院に滞在し、夫が迎えに来たとき、空港から到着したばかりの母が一緒にいるのを見て驚きました。母親ほど特別な存在はありません！

北部では、父と兄弟が足止めされていました。イスラエル軍が全ての道路を管理していましたため、彼らは脱出できなかったのです。移動を繰り返し、疲れ果てていました。逃げようとした人々の遺体や遺骨が道端に残されている光景を見て、父と兄弟を心配して止みませんでした。

夫もまた、南部にいる家族のことを心配していました。私たちがロシアの市民権を取得していましたので、ロシア大使館が彼らを避難させ、戦争から救い出しました。夫は久しぶりに笑顔を取り戻しました。それでも、義理の姉妹がイスラエル軍に命じられて、手を頭にのせて一列で行進させられたと聞いたときは全身が震えました。

ガザでは、家を破壊されたり、爆撃されたりしていない人は一人もいません。一年が過ぎ、私の息子は1歳になりましたが、まだ戦争は終わりません。私の心の中では常に戦いが続いている。ある声は「国は失われた、もう戻れない」と言い、別の声は「ガザは以前よりも良くなって戻ってくる」と言うのです。

ガザには多くの大切な人々が残っています。神に感謝すべきことに、この残酷な戦争で私は誰も失っていません。同時に、私の子供たちが無事でいることに感謝しています。ただ、私の子供たちがいつの日かロシアを自分の故郷だと思い、パレスチナやガザを忘れてしまうのではないかと心配しています。彼らがアラビア語を話さない外国人の子供のように育つことを恐れています。

私はガザが戻ることを願っています。そして、神がガザの人々を慰め、すべての殉教者たちに慈悲を与えてくださいますように。アーミーン！※1

訳注

※1 英語版では「Amen（アーメン）」、アラビア語版では「اَمِين（主よ）」とある。このテキストが基本、英語版を訳しているものであること、祈りの最後の言葉であることから「Amen（أَمِين）」とし、イスラム教での表現とした。

#19 アリー・アブー・ヤースィーン-2024年11月8日

世界へのメッセージ

- 母が叫びました。 「ああ、私の花よ！あなたの息子は何をしているのですか？！あの子の馬鹿げた言動で私たちに恥と屈辱をもたらしています！」
- 「放っておけばいい、好きに言わせておけばいい。私だって若い頃は村で民俗舞踊団をやっていたんだ。それにアルグール^{※1}も演奏していた。」
- 「ええ、外から光を持ち込んだわけではないわ。」
- 「何？なに？いま、何を言おうとして飲み込んだ？」（彼女の意図は『ノールナ（光っぽさ）』で、それは無礼な態度を意味する^{※2}）
- 「何も飲み込んでなんていません！息子のことは、あなたの自由にしてください。そうして、あなたの言葉は隣人から受け取ってください。^{※3}『馬鹿げてる^{※4}』って何ですか？アリー、馬鹿げてるですって？！」

おそらく、ビーチ難民キャンプに初めてウード^{※5}が持ち込まれたのはこの時が初めてで、私は13歳でした。家の外にウードを持ち出すときはUNRWAから冬の援助として支給された毛布に包んでいました — それはまるで、死体を隠しているような気分でした。

私は占領下の田舎の土地で働いてお金を貯め、13歳のときにウードを買いました。その値段は200ヨルダン・ディナールでした。私は10歳から働き始めました。

2023年10月7日に戦争が勃発したとき、私たちは10月11日にビーチキャンプからデイル・アル・バラへ逃れました。数日、長くても一週間で戻れると思い、着替えだけを持っていました。そのため、ウードをタンスの上に置き、その下に服の山を詰めて爆撃の振動で壊れないようにしました。それを確認して家を出ました。家を出る前に最後に見たのがウードでした。南部に避難した誰もが、この戦争がこんなに長く続くとは思っていませんでした。いま400日が経ち、避難生活が13か月となりました。ウードから離れていることが耐えられません。この間、演奏も歌も歌ってはいません！400日の間、ほとんどの時間を家族、友人、隣人、子供たち、そして町の人々を思い、涙に費やしました。戦争に関わるすべてが涙を誘います — いや、狂気に駆り立てます。

人々が目的もなく彷徨い、正気を失い、狂気に陥っていくのを目の当たりにしてきましたが、もはや誰がより狂っているのかわかりません。狂っているのは私たちなのか、それとも一つの国がまるごと消滅しようとしているのを、ただ黙って、何が起きるかを見ているだけの世界なのか？

戦争や私たちの状況についてだけを話したいわけではありません。私はウードと声を取り戻し、歌いたいのです。よく夢でウードを弾いている自分を見ます。そして目が覚めると指がウードの弦を弾くように動いているのです。ウードを、私の声を、返してください！

もう一つの悲劇は、この35年間一度も舞台を離れたことがなかった — 俳優、演出家、脚本家、そしてトレーナーとして、私は一度も演劇の仕事を休んだことがありませんでした。私は舞台に立ち続けてきました。それなのに、この400日間一度も公演していない、舞台に立つことさえできていないなんて、そんなことってありますか？劇場は私の第二の家です。家族と過ごすよりも多くの時間を劇場で過ごしてきました。私を舞台に戻してくれ！

イスラエルはすべての劇場を爆撃し、破壊したのは知っています。でも戦争を終わらせてください。そうしたら、私たちは路上で公演します！舞台も音響も照明も装置も必要ありません。ただ、路上、そして私と観客がいればそれでいいのです。占領軍が道路を破壊したのも知っています。それでも、私たちは負けません。屋根を見つけます、爆発を免れた屋上を。そこに上がり、瓦礫のまわりに集まる人々を前に公演をします。この公演では、ウードが音楽や必要な要素すべての代わりを果たします。素晴らしいアイデアでしょう？

戦争が終わり、私がまだ生きていれば、そうします。もっとも、ウードがまだタンスの上にあればの話です。そもそもタンス自体が残っているのかも疑問です。というのも、我が家上の階が破壊されたのを、友人が送ってくれた動画で見たからです。息子のアムヤドが結婚して新生活を始めるために準備していた部屋も完全に壊されました。

話を戻しましょう。この公演はきっと報道陣を引きつける一劇場、荒廃、そして観客は子供たち、女性たち、若者たち、高齢者たちーなんて素晴らしい組み合わせでしょう！観客は座るか立つかできます、好きなように。選択肢は、折れた柱、壊れた子供用ベッド、歪んでひっくり返った鍋、あるいは折れた木の切り株など、たくさんあります。大事なのは、この戦争を終わらせ、私を故郷に戻すことです。私はこれまで3か月以上故郷を離れたことがありませんでした。これ以上は耐えられません。

私の書斎に、私の世界に、私の劇場に、私のウードに、私の観客の元に、私を戻してください。私は彼らが恋しい、そして私自身が恋しい！この400日間、私は迷子になったままです。私を私の居場所へ戻してください。自分が何者であったのか忘れてしまいました。

この戦争はいつ終わるのか？それとも、どうなんだ！？

訳注

※1 アラブの伝統的な管楽器

※2 「ノール」(نور) = 「光」を意味し、「ノールナ」(النورنة) = 「光の様なもの」を意味する。母（彼女）の「外から光を持ち込んだわけではないわ」には「持ち込んだものは”光のようないいもの”」（見せかけ、無礼などの意）を含んでいると思われ、それを受けての父の返しと解釈できる。

※3 隣人の意見や言葉を信じるべきだ、または隣人の助言に従うべきだ、という意味で使われることが多い表現のこと。隣人との関係やその意見を重視するアラビア圏の価値観、文化的背景を反映した言い回しだと思われる。

※4 英文では「Tantina」アラビア語文では「طنطينة」とあり、方言やスラングで「ふざけた態度」「目立ちたがり」の意、または「騒がしい音」の擬音語などの意味を持つようです。息子（アリー）が母親の言っているイラついて言葉を吐いたと解釈し「馬鹿げてる」とした。

※5 アラブの伝統的な弦楽器

翻訳者より

新ガザ・モノローグ2024をお読みいただきありがとうございます。本テキストの翻訳をした私は翻訳家でもあければ、パレスチナ、アラブ文化の専門家でもありません。そのような者が、なぜ翻訳作業をしたのか？と言えば、単純に自分が読みたかったからです。そして、訳したものを作りながら公開しているのは、アシュタール劇場の呼びかけに応え、ガザの人々の声を少しでもひろげることにつながればとの思いからです。

ですから、皆さんのがこのテキストをイベントやスタンディング、様々なシーンで声にしていただこうことを拒むことはありません。しかし、繰り返しになりますが専門家ではないので、至らない点があるかと思います。(これを書いている今も“本当にこれでいいのか？”いう不安があります) そこで、できれば皆さんも[アシュタール劇場ウェブサイト](#)から公式に公開されている英語版・アラビア語版をダウンロードし、自らの手でその内容を確認してほしいと思います。そうする事で、翻訳の正誤のみならず、このモノローグに書かれている言葉一つ一つの深みを感じることが出来ると思います。

そういう中で、私の翻訳に対するお気づきの点がありましたら、ご連絡を頂ければと思います。皆さんの協力を得ながら、この翻訳がより忠実なものとなり、より誠実にガザの声がひろがっていけばと思います。

パレスチナの地に、平和と平穏が訪れる事を願って
2025.1.10
翻訳者・藤田ヒロシ
work@maigo.link

2025.1.11 「イントロダクション」修正